

# より良い働き方を目指して

## 変わる組織

入庁して約10年が経ちました。入庁時は、出勤は勿論、長時間勤務が当たり前で、周囲にテレワークをしている職員はいませんでした。

それが今、ここ数年で環境は大きく変化し、業務の大半が自宅で行えるようになりました。自分自身は週の半分程度テレワークをしていますし、育児中の職員に限らず全職員がテレワークしやすい環境になり、時間を有効に使うことができるようになったと感じています。

今担当している国際徴収の分野では、執行の現場から寄せられる様々な事案について国際的な枠組みを用いて徴収を実現する、という業務を担っています。海外税務当局とミーティングを行う際も自宅から参加できるようになり、働く環境の変化を実感しています。



国税庁 徴収部  
徴収課 課長補佐  
塩田 真弓 平成25年入庁

## 変わる私の働き方

出産に伴い産休・育休を取得し、復帰後は育児時間制度を使い、17時に退庁し、保育園の迎えに向かっています。子どもの発熱等で急遽休暇を取得することもあります。周囲の理解と協力が助けられ、なんとか日々乗り越えられています。

私は仕事と育児の両立をスタートしたばかりで、思うようにいかない葛藤を抱えながら、試行錯誤の毎日です。今はまだきちんと両立できていると胸を張れる状況ではありませんが、家族との時間を大切にしながら、やりがいのある仕事に携わることができ、毎日がとても充実しています。



地元ケーブルテレビに出演し、確定申告をPR



地元企業でつくる瀬戸旭法人会女性部会の皆様と(筆者は下段中央)



## 税務署のトップとして

税務署長は、税務行政の現場における最終責任者です。課税処分や財産の差押えは「尾張瀬戸税務署長 小森一馬」の名で実施され、場合によっては納税者の人生をも左右するため、責任重大です。迷う案件もありますが、現場で百戦錬磨の経験を持つ職員達と議論・検討を重ねて判断しています。

また、税務署全体をマネジメントするということも大切な業務です。チーム全体のパフォーマンスを上げるためには、職員一人一人が心身ともに健康で、課題等に対して誰もが自由闊達な議論が行える環境構築が重要です。そのため、定期的な職員との1on1ミーティングや普段の声掛けなどを通じて、明るく風通しの良い職場づくりを心掛けています。

さらに、税務署長は「地域の顔」としての役割も担っています。市長をはじめとした地方自治体の方々、地元の企業が参加する法人会など各種関係民間団体、税理士会などの方々とも積極的に意見交換を行ったり、地元のお祭りに参加したり、各種セミナーなどで講演したりと、税のPRもしつつ、私自身も多くの学びを得られる貴重な経験となっています。

尾張瀬戸税務署は、日本有数の陶磁器である瀬戸焼の生産地として知られる愛知県瀬戸市に所在し、隣接する尾張旭市を含めて2市を管轄する税務署です。私は、この尾張瀬戸税務署の第60代税務署長として、署職員54名とともに日々仕事をしています。



名古屋国税局  
尾張瀬戸税務署 署長

小森 一馬 平成24年入庁

## 子育て中の単身赴任 ~税務署長もテレワーク?~

私には妻と2歳の娘がいますが、共働きであるため、やむを得ず単身赴任となりました。妻は、私が税務署長としてのキャリアを早くから希望していたことを知っていたため、それを応援したいと快く送り出してくれました。とはいえ、イヤイヤ期真っただ中の娘のワンオペ育児は、妻に負担がかかります。そこで私は、テレワーク制度を大いに活用させていただいています。この制度を活用すれば、セキュリティが確保されたオンラインにより、署長決裁や各種会議、職員との面談等、署長業務の多くを東京の自宅で実施することができます。これにより、公務の都合にもよりますが、概ね月の3分の1以上は、東京で過ごすことが可能となっています。もちろん、この実現には職場の同僚や家族の協力が不可欠であり、私を支えてくれる職場の同僚や家族には、感謝しています。

## 最後に ~国税庁総合職の魅力~

国税庁総合職職員として入庁し、はや10年が経過しました。辛いときもありましたが、飽きることはなく、総じて楽しかったし、10年前の自分と比較しても、明らかに成長しているという実感と自信があります。国税庁総合職で入庁すると、施策立案の霞が関と現場を行き来することとなります。現場で起きていることを正確に把握し、課題を抽出し、そこからどのような対応策を立案するか。そして、どんな将来の税務行政を創造するか。それが我々国税庁総合職の担うべき責務であり、魅力だと思います。

